

書 評

ジェニファー・コーツ著 吉田正治訳

『女と男とことば』 ——女性語の社会言語学的研究法——』

原 田 園 子

ことばは伝達の主たる一手段である。ことばは二重性を持つもので、言語とその提示内容とは切っても切り離せないものである。言葉を使って人間はその提示内容である、ある客観的事実を伝えたり、自らの考えや感情を述べ伝える。ことばの機能はこれだけではない。人間社会においては、ことば、あるいはことば遣いによって、指示内容以上のものが伝達される。また、話す行為によって、話し手は自分のある意図を伝えようとする。話し手と聞き手の社会的位置関係もことばによって表わされる。一言語内の、ある一貫する言語上の特徴を持ったことば遣いである、言語変種性と、言葉使用の場面、話し手と聞き手の社会的位置、さらにこれらを取り巻くコンテクスト等との相関関係を研究する学問分野である社会言語学は、今世紀後半に確立されるようになった比較的新しい科学的研究分野であるが、言語の変異性は構造化されたものであり、これは、やはり構造化された社会変異の結果であることが既に明らかにされている。

ジェニファー・コーツ著、吉田正治訳『女と男とことば』は、女性と男性が存在する人間社会という観点からの言語使用（ことば）の研究を扱った社会言語学書である。言語形態は、話し手の社会階級という社会的文脈によって規則

的に変化するという現象を踏まえ、一つの社会グループとみなされる女性のことばと別の社会グループとしてとらえられる男性のことばとの違い、つまり男女の言語使用の違い、を記述し、ことばと性の相互変異を社会言語学的に説明したものである。本書は、各部が3章ずつの3部構成になっており、第1部(序説)において、先ず、古くは18世紀の民俗言語学的な、男性によって劣等視されていたことを示す、女性の使う言語観、19世紀の科学的言語学の初期の研究者や文化人類学や方言学の記述する、性別による好み(sex-preferential)を反映した、女性言語を概観することから始められ、第2部(社会言語学的証拠)第4章「数量的研究」では、今世紀後半より確立されてきた、社会的次元に注意を向けて年令、性、社会階級、教育、民族集団等の要因による言語変異性を研究した、社会言語学の多くの調査について、その方法と結果を紹介し、実証的に明らかにされた男女差のみられる言語使用が示されている。

第5章「社会網」では、社会科学の分野で用いられる“社会網”の概念を説明し、1970年代から始められた、この概念を使っての社会言語学の研究を取り上げている。一言語の標準形には公然たる威信(prestige)があり、その言語の一変種である土地言語形は隠れた威信を持っている。一般に、女性は比較的密度の濃い、多層的でない社会網に属し、前者に魅かれ、密度の濃い、多層的社会網に属している男性は、後者に魅かれることが述べられ、社会網の有りが土地言語の規範の維持、あるいは強制とかかわっていることが指摘されている。

ある言語の使い手は、その言語における伝達能力を持っているわけであるが、この伝達能力とは、その言語における文法性とその言語の使われる社会での“使用上の適切さ”とで定義される。第6章「伝達能力における性差」では、社会的場面における、この適切さの側面から女性と男性の言語使用上の違いが扱われており、女性と男性では会話場面における適切さがどのように異なるのかが論じられている。会話の最中の遮り行為は、その会話における話す順番のルールを破るものであるが、コーツは、過去の多くの研究を参照しながら、男

性には、話題を支配するために、この遮り行為をしばしば行なって、話す順序の正常な交替規則に従わない傾向があることを指摘している。一方、あいづち、うなづき等の最少の反応は、聞き手が話し手の話すことを積極的に聞いていることを示すものであるが、女性には、これをしばしば使ったりして、話し手と聞き手との連帯意識と支持に基づいた会話の運びを好む傾向がみられる。言語使用におけるこのような競合的・自己主張的男性スタイルと共同的・支持的な女性スタイルという違いが明らかにされている。

コーツは、これらの調査結果に基づいて、“女性も男性もそれぞれに異なる言語社会を形成していると言えそうである”とし、第3部（原因と結果）第7章「性別言語の習得」で、これもまた比較的新しい学問分野である子供の言語（母語）獲得研究に言及し、子供は母語を獲得する過程において、その言語の言語上の規則だけではなく、言語による伝達行為に含まれる文化的規範をも習得していくわけであるから、どの文化においても区別されている女性と男性の役割、つまり性に基づいたそれぞれの文化的役割をも身につけていくことになることを述べ、子供のことばに性差がみられることを示す研究の成果を紹介している。音韻の変異性と同様に、伝達能力においても性差が極めて早い時期—10才前後—よりみられ、子供達は自分達の性に適切な態度と共に、その社会における男女差に基づいた言語的信念を学んでいるとしている。

第8章「言語変化における性差の役割」では、言語変化には、意識的なものと意識下で行なわれるものがあることを指摘し、いくつかの調査に基づいて、話し手が積極的に進める、その言語の威信形に向かう前者の推進者は女性であり、威信形から離れる方へ向かう後者のそれは男性であることを示している。更に、言語変化の先導役を務めるのは、次の世代を育てる中心的役割を担っている母親としての女性であるとした従来の多くの社会言語学者の主張に対し、これを証拠だてるものがないとし、話し手が言語上の影響を受けるのは、“親”というより“仲間”であり、話し手が帰属意識を欲するグループのことばを真似る時に言語変化が生じる、と実証例を挙げて述べている。この点につい

ては、社会言語学に関しては、初歩的な知識しか持ち合わせていない筆者の素人的な観察からでも、子供がその生活の各場面で、つまり極く小規模な社会単位で、ことば遣いを変える——例えば、家庭内では親や祖父母等の示す規範による標準語、あるいはそれに近いことば遣いとイントネーションを用い、学校でや遊び仲間とでは関西弁のそれに変える——という例を観ても、“仲間”への帰属意識からのことばの使い分けが、やがて、子供達の社会が成長と共に広がっていくに従って、同世代の人々と共有する社会的価値観に基づいて、大規模な言語変化へと結びついていったりするのであろうか、と考えることができる。

いくつかの地域で行なわれた調査結果に示されている、上記の女性の引き起こす威信形に向かう傾向と、男性の引き起こす土地言語に向かう傾向という、言語変化の形態に関するコーツの考察は、女性も男性も言語に敏感であるが、それぞれ異なったモデルを意識しているということである。女性は高い地位指向の威信形に敏感であり、男性は連帯意識と伝統的に男らしさという価値観を表わす土地言語規範に敏感である。そして、威信形としてのその言語の標準規範に忠実な女性の言語態度は、保守性と結びつけられているが、これは革新性と結びつけられている男性のことばの裏返しとして、女性のことばを説明するために、言われたのに過ぎないとし、本来は、言語変化の先導役を務めるどちらかの性が革新的なのであって、古い形式を保持しようとする他方の性が保守的となるのである。言語変異性は社会網の様相とかかわっているので、性役割が変わって、女性が密度の濃い社会網に属することになると、女性の用いる言語に土地言語に向かう現象がみられる。この場合は、女性が革新性と結びつき、男性は革新性と表裏をなす保守性と結びつくことになる。従って、どちらかの性が言語的に革新であるとするのは誤りで、言語における性差が言語変化のメカニズムに深くかかわっているらしい、とすることが正しいのであると論じている。

最後の第9章「言語における性差の社会的結果」では、先ず、性に基づく言

語差の引き起こす社会的結果が検討されている。先に述べられたように、女性は会話を“協力”を基に、男性は“競争”を基に作り上げる傾向があるが、著者は、このような会話スタイルの全体的相違が男女間のコミュニケーションの不成立を引き起こす要因となし、それぞれのこのような傾向を持った会話形体ゆえに、女性は男女混合のグループでは支配されるという点で、男性は協力的に話題を続けていこうとする特徴を欠いているという点で、両者はそれぞれに不利であるとしている。

次に、このような特徴を持った女(子)と男(子)のことばの違いが、学校という教育の場でどのような結果をもたらしているかについて検討している。女子生徒は成績が良いにもかかわらず科学技術を尊重する社会における学校では不利な立場にあることが指摘され、さらに、女子生徒と男子生徒とのことば遣いの著しい違いが両者の相対的地位に関係しており、男子生徒は教室で支配的立場を取るためにことばを用いるので、この点でも女子生徒は不利な立場にあるとしている。しかし、これらの不利も、ことばそのものが直接的に引き起こすわけではなく、究極的には言語的というよりは社会的な原因によるものであることが述べられている。

以上のように、コーツは、ことばには明らかな性差が在ることを論証し、言語行為は帰属を表わす行為であり、われわれは、話すことによって、社会的性としての女性であるか男性であるかを明らかにするのであるとし、会話の参加者すべてが同性である場合には社会的性の階層は無関係となるが、男女混合の会話においては“支配”と“圧迫”が意味を持つようになるとまとめている。最後に、社会言語学的研究においては、言語における性差は言語外の社会的区別と複雑に絡み合っていることを銘記しなければならないことの重要性を繰り返し、より精密な社会理論の必要性を挙げている。

本書は、『法助動詞の意味論』(1983)等の著作で、言語学の分野で著名な英文法学者であり、女性運動とかかわりを持っている著者が、エッジヒル大学で長年講じていたことから発展して書かれたものとのことで、それ故、たいへん

分かりやすい、よく整理された構成の内容になっている。社会言語学や社会学の用語や、「罵り語」「ゴシップ」等の調査項目の定義、調査言語の言語変異性を示す言語学上の音韻特徴等を先ず明確にして、各研究調査を紹介、解説し、その調査結果の考察を豊富な例に基づいて述べている。従って社会言語学あるいは社会学や言語学をあまり知らない者にとっても大変分かりやすくなっている。女性運動と結びついて、旧来の男性のことばを規範とする一般的な女性言語観をみなおすべく始められた、本書にみられる考察は、著者の“性別による好み”の先入観を越えたそれであろうと努められた、という点も含めて、社会言語学的な女性言語研究に初歩的な関心を抱く者にとって、また、できる限り自分自身の性にとらわれないように女性問題を研究していこうとする男女の女性学研究者にとって、興味深く読める書であり、この分野の専門的研究への案内書としても（この書のカバーに記されているとおり）優れたものであると思われる。翻訳についても平易な日本語になっており、大変読みやすくなっている。

（研究社出版、1990年2月、本文211頁、2580円）